慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ラモト・ギレアドとマハナイム : 北西ヨルダンにおける踏査
Sub Title	Ramoth-Gilead and Mahanaim : a general survey of Northwestern Jordan
Author	杉本, 智俊(Sugimoto, Tomotoshi)
Publisher	三田史学会
Publication year	2003
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.72, No.2 (2003. 6) ,p.155(293)- 179(317)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20030600-0155

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

研究ノート

ラモト・ギレアドとマハナイム：北西ヨルダンにおける踏査

杉本智俊

一　はじめに

日本聖書考古学発掘調査団（団長：月本昭男立教大学教授）は、二〇〇二年度の調査としてヨルダン北西部の踏査を行った。まず八月二十六日―九月三日まで杉本智俊と江添誠が予備調査を行い、本調査は十二月二十六日―二〇〇三年一月三日まで総勢十八名で行った。本調査の参加者は、月本昭男、市川裕、桑原久男、山内紀嗣、日野宏、越後屋朗、平川敬治、中野晴生、宮崎修二、長谷川修一、山吉智久、巽善信、千巌ふみ、細田あやこ、飯降美子、高田学、江添誠、杉本智俊である。この調査のためにヨルダン大学のサブリ・アバディ教授の御協力をいただけたのは、大きな助けであった。記して感謝したい。

二　調査目的及び調査方法

当調査団は一九九〇年以来イスラエル国ガリラヤ湖東岸に位置するエン・ゲヴ（En-Gev）遺跡で発掘調査を行っているが、今回の調査はその背景となるトランスヨルダン（ヨルダン川東岸地域）の考古学的状況を把握することにあった（図1）[1]。現在の国境は異なっていても、古代においてエン・ゲヴ遺跡はむしろトランスヨルダンの遺跡と文化的にも歴史的にも密接な関係を持っていたと想定されるからである。

しかし、同時にこの地域の歴史理解はそれ独自の意味

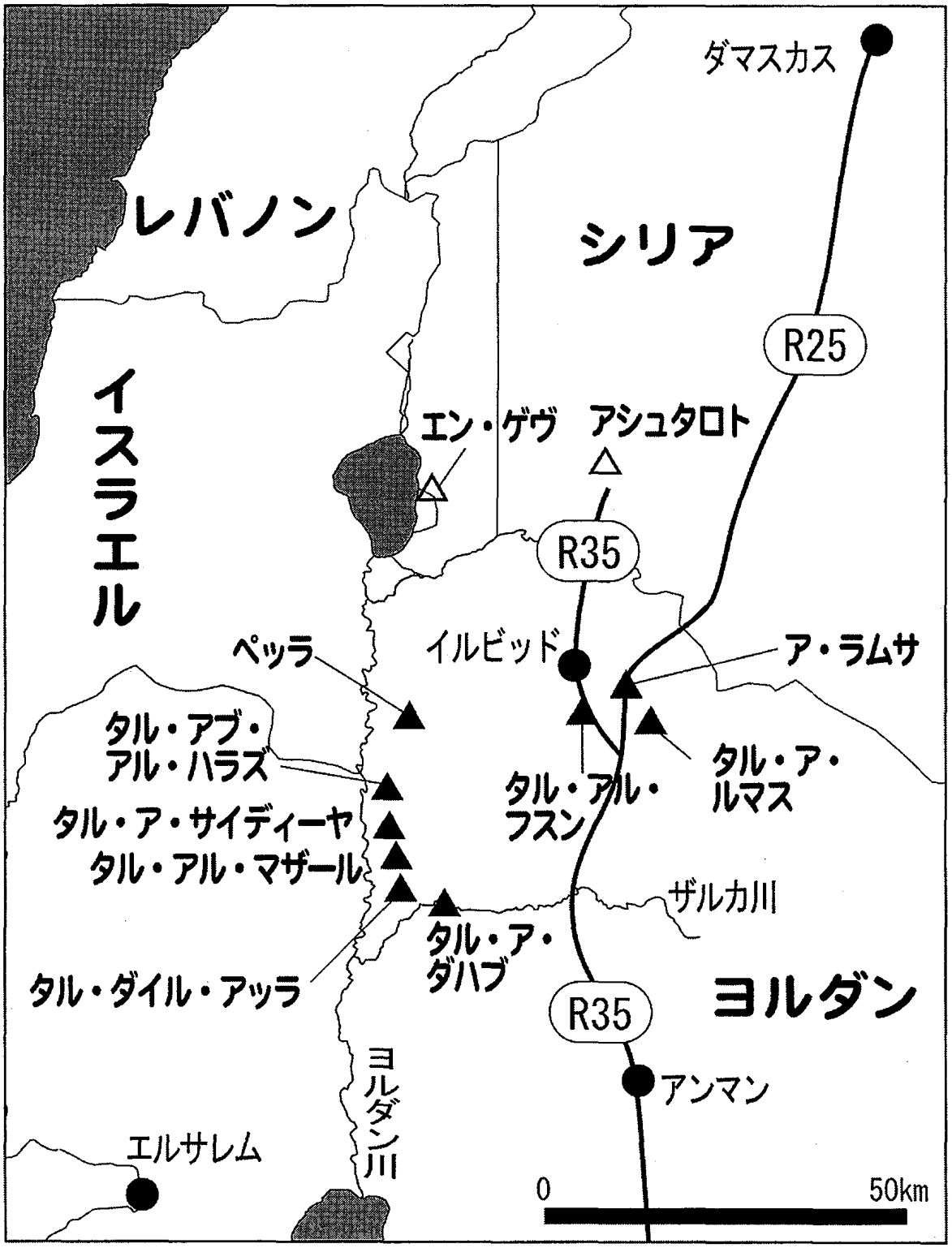

図1　北西ヨルダンの遺跡

を持っているともいえる。特にこの地方は前一〇世紀にはイスラエル領、前九世紀にはアラム領、その後はアンモン領と変化したと考えられ、それぞれ研究の十分進んでいない分野だからである。また、ここには「王の道」が走っていたことが知られ、古代の交易ルートを理解する上でも重要である。(2)

このため、今回の調査では網羅的に遺跡の分布を把握することよりも、歴史的に重要なラモト・ギレアド、マハナイムといった核となる遺跡を中心にその位置と現状を確認することに主眼を置いた。具体的には現地の人々からの情報収集、遺跡及びその環境の観察、遺物の収集、写真撮影などを行った。調査地域としては、王の道以西、ザルカ川以北の範囲である。

三　ラモト・ギレアドをめぐる遺跡

ラモト・ギレアドは、アラム・ダマスカス王国の物質文化を理解する上で重要である。アラム・ダマスカス王国は、ダビデ・ソロモンによるイスラエル統一王国が分裂するのとほぼ同時に、前一〇世紀末頃からトランスヨルダンに勢力を拡大してきたと一般に考えられている。エン・ゲヴでも鉄器時代第Ⅱ期の方形の城壁や公共建造物（列柱式建物）が検出されており、この遺跡が聖書の語るアラムのアフェクである可能性が高くなってきている（Ⅰ王20・26―30等、杉本二〇〇二）。(3) このため、エン・ゲヴ遺跡の性格は南方に進展してきたアラム・ダマスカス王国との関連で理解する必要がある。しかし、アラム・ダマスカス王国の勢力範囲や物質文化についてはこれまでのところほとんどまとまった研究がなされていない。(4) 特にシリアではダマスカス以南の鉄器時代の遺跡についてほとんど調査がされていないので、ダン、ベツサイダ、エン・ゲヴ等アラムとの関連が考えられるイスラエルの遺跡やラモト・ギレアド等アラム領にあったことが知られる北ヨルダンの遺跡を総合的に研究してアラムの物質文化を理解する必要がある。

ラモト・ギレアドは、すでにイスラエル王国成立以前からガド族の「レビ人の町」、「逃れの町」として聖書に登場する（「レビ人の町」：ヨシュ21・38、Ⅰ歴6・80。「逃れの町」：申4・43、ヨシュ20・8）。また前一〇世紀中頃のソロモン時代には十二の行政区の内ギルアドとバシャンの知事ベン・ゲベルの居城があったことが記さ

れて（Ⅰ王4・13）おり、イスラエルの領土内にあったようだ。しかし、前九世紀半ばになると、イスラエルの王（アハブ？）はアラム・ダマスカスのベン・ハダドからこの町を取り戻そうと戦ったことが記されており、（Ⅰ王22章）、それ以前のどこかの時点でこの町はアラム領に移っていたと思われる。[5] その十二年後この町は再びイスラエルの王ヨラムとベン・ハダドの後継者ハザエルの間で争われたが（Ⅱ王8・28―29）、結局アラムのハザエルがこの町を含めトランスヨルダン地域を征服したことが記されている（Ⅱ王10・32―33）。

このラモト・ギレアドだと同定されてきた遺跡には三箇所あり、現在のところまだ確定できていない。オルブライトは現在のア・ラムサ（Ar-Ramtha）の町の南西十六キロメートルのところにあるタル・アル・フスン（Tall al-Husn）と同定した（Albright, 1929）。しかし、その後グリュックはア・ラムサの南七キロメートルのところにあるタル・ア・ルマス（Tall ar-Rumeith）を提唱し（Glueck, 1943）、こちらのほうが優勢である。また、現在のア・ラムサの町の下にある遺跡こそラモト・ギレアドであったと指摘する者もいる（Smend 1902：158；Hölscher 1906）。今回はこれら三箇所すべてを調査することができたので、順次その状況を記述していきたい。

（1）タル・ア・ルマス

タル・ア・ルマスは、古代の「王の道」の上を北上してきたと思われる国道35号線が東西に二股に分かれた東側の道路（国道25号線）の脇にあり、さらに北上するとア・ラムサを経てダマスカスに繋がっている。25号線はヤルムーク大学の広大な理工系キャンパスを南東の角にして東西に走る道路と十字路を形成しており、テルはその東西を走る道路の南東側、すなわちキャンパスの東側の入り口の若干外側に位置している。道路の前面には平坦地が広がっているので、テルの外周部分ははっきりと認められる。

この外周部分の内側に一度窪みがあり、その先にテルそのものがあった。テル自体はそれほど大きくなく、一辺五〇メートルぐらいの矩形をしていた。ここでは一九六二年と一九六七年にP・ラップが発掘調査を行っており、前一〇―八世紀の居住層を確認したが、その後この遺跡は破壊され前二世紀まで放置されていたようだ（P.

Lapp 1967；1968)。特に第Ⅷ層（ソロモン時代？）では泥レンガの城壁、第Ⅶ層（ベン・ハダド時代？）ではその外側に造られた石製の城壁が報告されているが、今回の調査では石製の城壁だけが確認できた（図2）。壁の厚さは一メートル強で、東側と南側の二辺と入り口部分が確認できた。発掘者はシリア（アラム）の土器が出土したことを報告しているが、これは今後の検討課題である。今回表採した遺物は主として鉄器時代のものであった。

この遺跡をラモト・ギレアドとする根拠としては、その名前にラモト（ルマス）が残っていること、「王の道」に近いこと、発掘された遺構の年代が聖書等で知られる歴史的経緯と合致することが挙げられる。しかし、この遺跡がかなり小規模である点は、この町の果たした大きな歴史的意義からすると無理があると指摘する者もいる（Lemaire 1981；N. Lapp 1997)。

たしかにこのテルは今回の調査した遺跡の中でも最小の部類に入り、壁も城壁の壁とするのにはかなり薄い。また「王の道」はアシュタロトを経てダマスカスに繋がっていたと考えられ、そういう意味では現在の25号線よりも35号線のほうが古代の「王の道」を反映している可能性が高いだろう。このため、地名や年代が合致していることは認められるが、現状ではラモト・ギレアドと断定するには慎重であるべきだろう。さらに「ラモト」というヘブライ語は複数形なので、このように孤立した遺跡丘にふさわしいのかという意見も出された。[6]

（2）タル・アル・フスン

タル・アル・フスンは、国道35号線が二股に分かれた西側（35号線）にあり、イルビッドの南、アル・フスン村の中央の交差点の南西角に偉容を見せている（図3）。これはかなり大きなテルで、遠くからはっきりと認められた。規模的には、ハツォルほどでなくともメギッド程度の大きさはあると考えられる。

テルの北西側には岩盤が露出して洞穴になった部分があり、牧羊者たちが住居として使用していた。また、テルの頂上部の南半分は現在の墓地で埋め尽くされており、大きな墓はテルの下からも認められた。しかし、最も高くなった北側部分にはまだ墓は及んでおらず、発掘可能

図2　タル・ア・ルマス

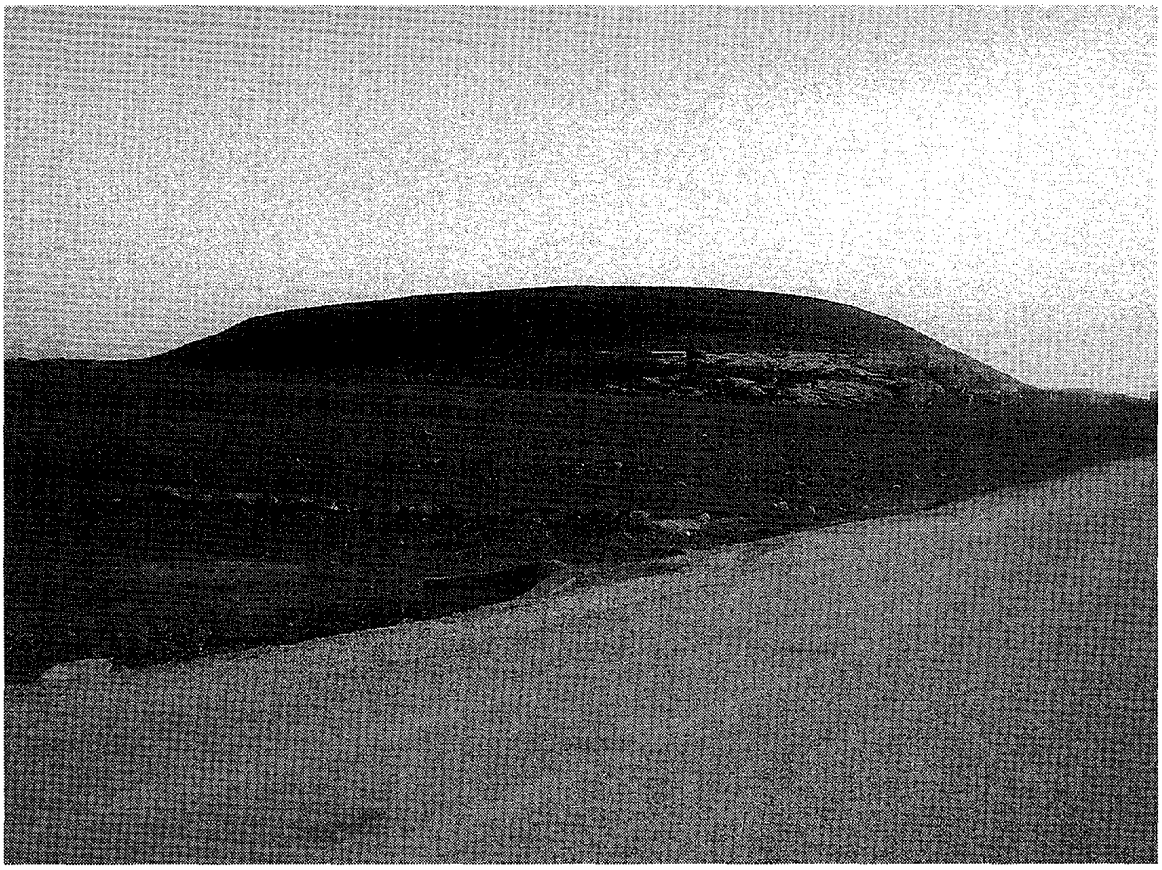

図3　タル・アル・フスン：北から見た全景

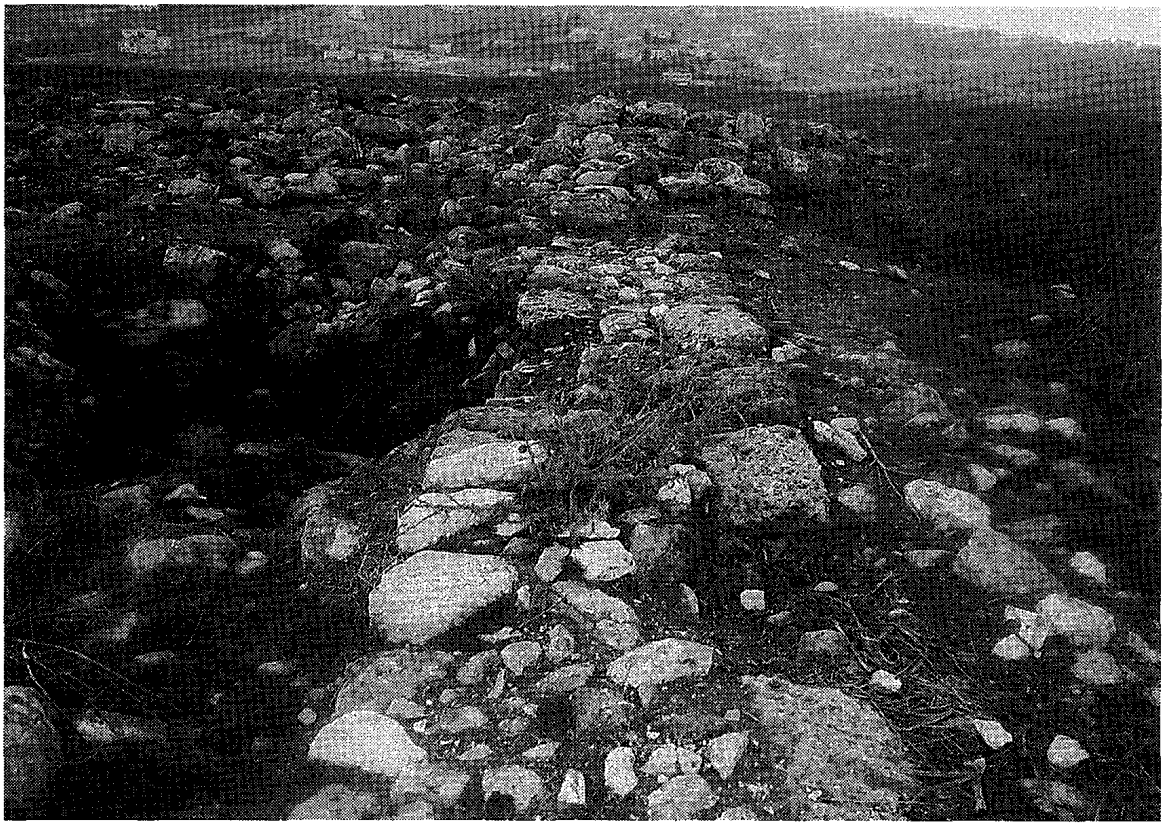

図4　タル・アル・フスン：アクロポリスの遺構

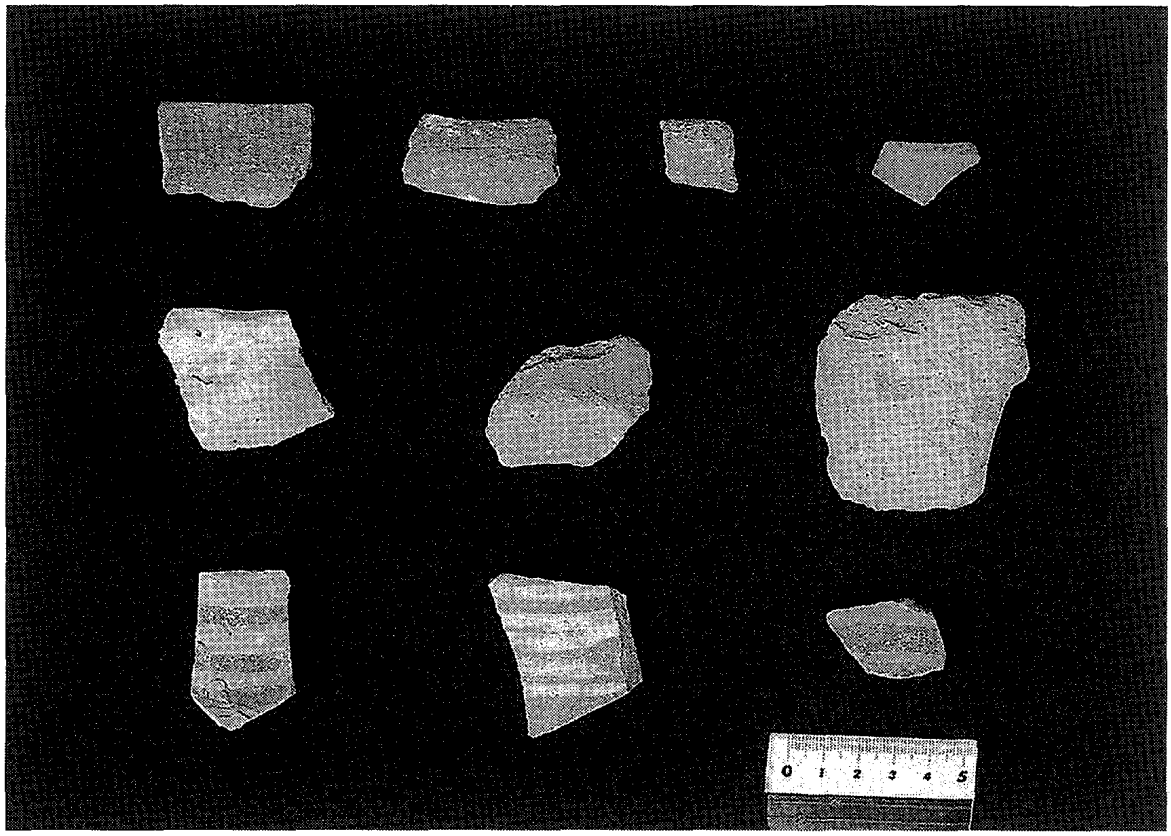

図5　タル・アル・フスンの土器

な部分がかなり残されていた。北側のアクロポリスと考えられる部分の北辺には幅一メートル強の石の壁が確認でき、数十メートルほど続いていた（図4）。その北西端、北東端及び中央部分には四角く張り出した塔の基礎部が残っていた。また、テルのさらに北側斜面と南側斜面には複数の石列が確認でき、おそらく城壁の跡だと考えられる。アクロポリスの中央東には深い縦穴があり、入り口は石で整えられていた。現地の人の話によると、かなり長い水路だということである。表採した土器は、鉄器時代とイスラーム時代のものが中心だった（図5）。

タル・アル・フスンは現在の墓地が頂上を覆っていることもあって、これまでほとんど調査がされてこなかった。唯一レオナードが水路を調査しており（Leonard 1987）、これはおそらく我々が確認した縦穴であろう。レオナードは水路の土器が鉄器時代のものだったことを報告しているが、これだけではアクロポリスの石列や城壁の年代は確定できない。しかし、ここに鉄器時代の町があったことはほぼ確実であり、今回表採した土器もそのことを支持している。

タル・アル・フスンは、その堂々とした規模から聖書がラモト・ギレアドに当てはめている歴史的重要性にふさわしい。位置的にも国道35号線は北でアシュタロトを経由してダマスカスに繋がっていたと思われ、古代の「王の道」を反映している可能性が高い。年代的にも聖書から知られる歴史と合致している。たしかにこの遺跡にラモトという地名は残っておらず[7]、本格的な発掘調査もなされていないのでこれ以上の判断は難しいが、ラモト・ギレアドの有力な候補地だとは言えるであろう。

タル・アル・フスンは現在でも墓地として使用されており、実際の発掘調査を行うには現地の人たちとの交渉にかなり手間取るだろう。しかし、遺跡丘はアバディ教授によると考古局が買い上げており、理論的には発掘が可能である。また、テルの北側半分にはかなり広い面積が墓にならずに残っており、遺跡の規模からもラモト・ギレアドとの関連性からもさらに調査する価値がある。

（3）　ア・ラムサ

ラモト・ギレアドとの関連でもう一つ可能性のある遺跡は、現在のア・ラムサの町の下にあると言われるもの

である（図6）。しかし、これは遺跡として特定されているわけでなく、若干の出土遺物からここに古代の町があったことが知られているだけである。今回は現地の考古局の職員のご好意で遺物が集中して露出している所に案内していただいた。

この場所はア・ラムサの町の北側の一番高くなった丘の東側斜面で、崖状になっていた。崖の上には現在の住宅が立っていた。採集できた土器は鉄器時代とローマ時代のものだったが、遺構らしいものは一つも確認できなかった。当然遺跡の規模も形状もわからなかった。

ここも地名、丘の上にあること、土器から知られる年代では、ラモト・ギレアドの条件に合っている。しかし、遺構も遺跡の規模もわからないのでは、そう断定するだけの情報がないとせざるをえない。また、この町は国道25号線上にあるが、古代の「王の道」は35号線に沿っていたと思われ、かなり距離がある。

以上見てきた三つの遺跡を考えると、断定はできないが、おそらくタル・アル・フスンがラモト・ギレアドの最有力候補であろう。タル・ア・ラマスは時代的にも地名からも可能性はあるが、規模が小さく、位置的にもあまり合っていない。ア・ラムサも丘の上にあること、地名、土器から知られる年代は合っているが、現状では情報不足で、立地に問題が残る。一方、タル・アル・フスンは地名こそ残っておらず、調査も十分されていないが、遺構、遺物ともに当該時代の大きな町の存在を示しており、立地や規模からも可能性が高い。

一方、Ⅰ王4・13には「ラモト・ギレアドにはベン・ゲベル―彼にはギレアドのマナセの子ヤイルの村々とバシャンにあるアルゴブの地域で、城壁と青銅のかんぬきを備えた六十の大きな町々が任せられた」と記されており、ラモト・ギレアドには付随する町が数多くあったことがわかる。これらの一つ（おそらくタル・アル・フスン）がラモト・ギレアドだとすると、残りのものは「六十の町」の一つであったと考えることが可能であろう。そうすると、これらの町はみなイスラエル・アラムの勢力争いにおいてラモト・ギレアドと運命をともにした可能性があり、すべてアラム・ダマスカスの拡大に伴う物質文化の変化を捕らえるための比較資料にすることがで

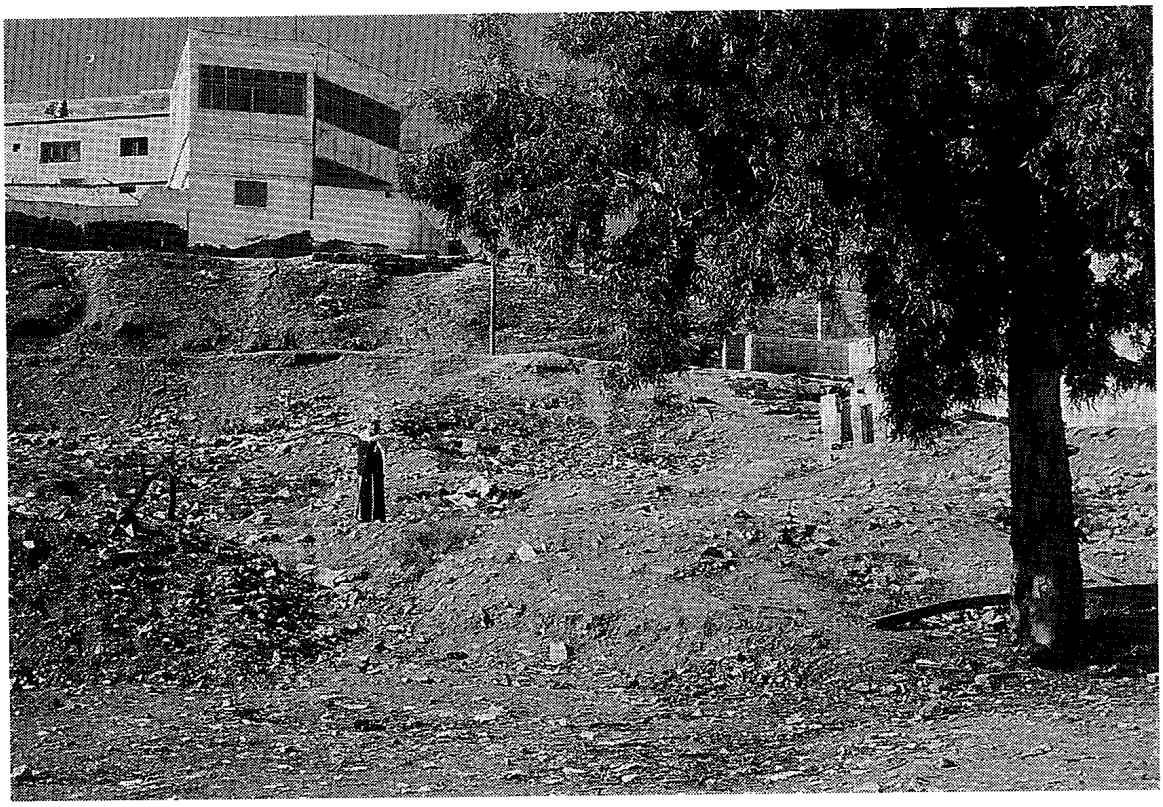

図6　ア・ラムサ

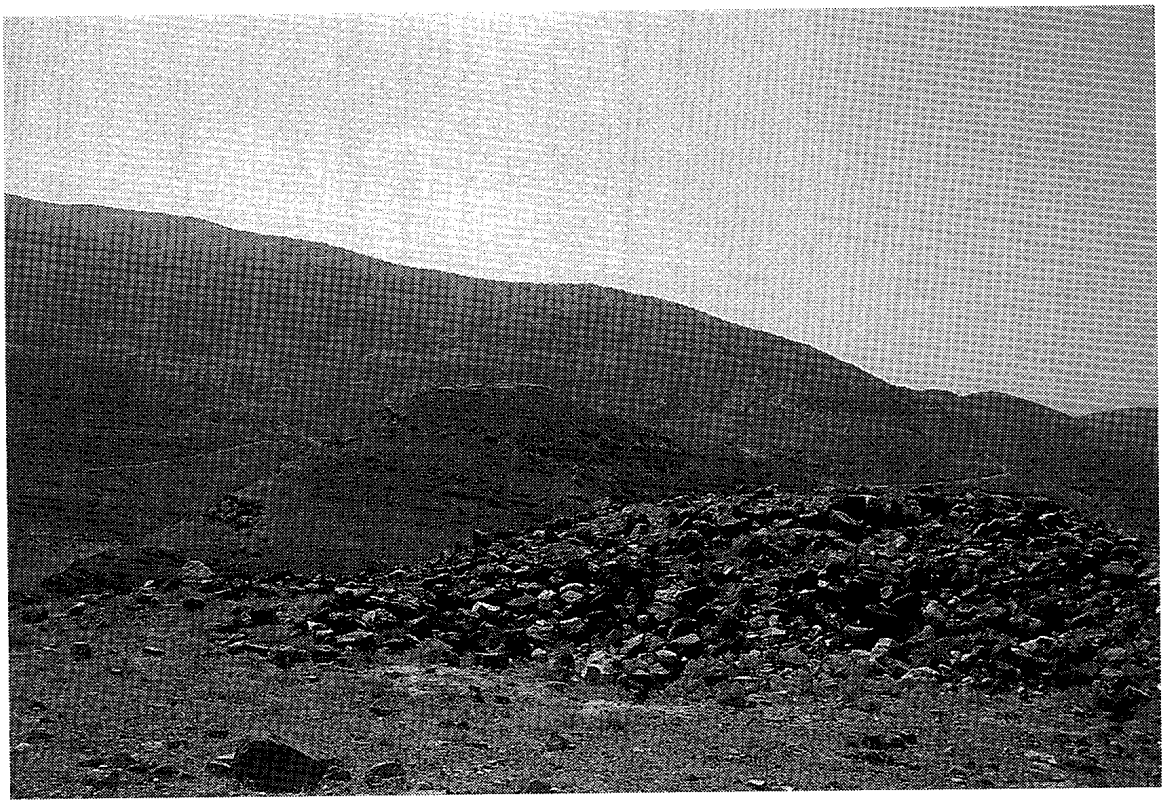

図7　タル・ア・ダハブ：シャルキヤからガルビヤを望む

きるかもしれない。

四　マハナイムをめぐる遺跡

マハナイムは、前一〇世紀のトランスヨルダンの政治的状況を把握する上で重要である。ダビデ・ソロモンといった初期イスラエル王国時代（前一〇世紀）の砦がここにあったからである。特にダビデはエルサレムに統一王国の首都を築くが、一時息子の反乱に会い、このマハナイムの砦に逃れて体勢を立て直したことが記されている（Ⅱサム17―19章）。ソロモンもここに十二行政区の首都の一つを置いた（Ⅰ王4・14）。それ以前の士師ギデオンやサウル王に関してもトランスヨルダンとの強い関わりを示す聖書の記事がある（士8・8―17、Ⅱサム2・9）[8]。マハナイムが最後に歴史史料に登場するのは、エジプト王ショシェンクの戦勝碑文（前九二五年）で、この遠征によって征服された町の一つとして記されている。

しかし、最近考古学的には強力なダビデ・ソロモンの統一王国は虚構で、前一〇世紀には貧弱な物質文化しかなかったという説が主張されている[9]。本当のところダビデ・ソロモンがどの程度の影響力をトランスヨルダンに持っていたかを知ることは、この地域の歴史を知ることはもとより、イスラエル統一王国の性格を知る上でも大きな意味がある。

マハナイムを同定するためには、族長ヤコブの伝承が役に立つ（創32章）。ヤコブはヤボク川（ワディ・ザルカ）を渡り、以前から仲たがいになっていた兄エサウに会おうとするが、恐れを感じ自分の天幕を二つに分けて別々に送り出した。その場所がマハナイムとされ、その名も「二つの天幕」を意味している。ヤコブはその後祝福を求めて神の人と格闘するが、そこはペヌエル（神の顔）と呼ばれた。エサウと再会した後、ヤコブはスコトに自分の天幕を張ったとされている。

これらの記事から一般に考えられている遺跡同定には二通りある。まずヤボク川（ワディ・ザルカ）がヨルダン川と合流する手前にあるタル・ダイル・アッラ（Tall Dair Alla）をスコトとするもので、その場合そこから東（上流）に十一キロメートルほど行った双子の遺跡丘タル・ア・ダハブ（Tall adh-Dhahab）をペヌエルとマハ

ナイムと考える（Slayton 1992 : 223）。またタル・ア・ダハブはペヌエルだとし、それ以外の遺跡（タル・ヒジャズ［Tall Hijjaj］等）をマハナイムとする意見もある（Noth 1960 : 183 ; de Vaux 1978 : 585 ; Weippert 1997 : 21, 32）。もう一つの説は、タル・ダイル・アッラをペヌエルとするもので、そうするとタル・ア・ダハブがマハナイムとなる（Dalman 1913 : 71–72 ; B. Mazar 1957 : 61 ; Aharoni 1979 : 439 ; Coughenour 1989）。この場合、スコトはペヌエル（タル・ダイル・アッラ）の近くの別の遺跡ということになるが、タル・アル・ヒサス（Tall al-Khisas）が候補として挙げられている（Abel 1967, 2 : 470 ; Franken 1979 ; Lemaire 1981 : 52–53）。今回はこのうちタル・ア・ダハブとタル・ダイル・アッラを調査することができた。

（1）タル・ア・ダハブ

タル・ア・ダハブはワディ・ザルカを挟んで大小二つの遺跡丘が存在する双子の遺跡で、ワディ・ザルカがこの地点でS字上に大きく蛇行するため、南北というよりも東側に小さいほう（タル・ア・ダハブ・ア・シャルキヤ）、西側に大きいほう（タル・ア・ダハブ・アル・ガルビヤ）が位置している（図7）。それぞれの遺跡丘は断崖絶壁の上に作られており、大きいほうの標高差は三〇〇メートル、裾の部分は石灰岩が直立する河岸段丘となっている。

この遺跡では一九八三年にアメリカ人のゴードンとヴィリアーズが表面調査を行い、露出している遺構のプランを作成し、遺物の表採をしているが（Gordon and Villiers, 1983）、発掘調査はまったくなされていない。ゴードンらによると、ガルビヤでは主として鉄器時代初期の土器とローマ時代の土器が見られ、五段のテラスが石壁によって形成されていたことが確認されている。今回は予備調査でシャルキヤを、本調査でガルビヤを調べた。

まずシャルキヤのほうには頂上に上る道がなく、石のごろごろする急な崖をまさによじ登る感じであった。頂上部分では特に東端と西端で石列が露出しているのが確認された。遺跡丘の西側は若干なだらかな傾斜になっているが、建築遺構らしいものはあまり見られなかった。表採できる土器は多くなく、鉄器時代とローマ時代のも

のが見られた。また貯蔵壺や水差し等は見られるのに対し、調理堝や鉢はほとんどなく、生活色の薄さを感じさせた。この遺跡は鉄鉱石を産出するアジュルン地方に位置するせいか、石そのものが赤紫色をしており、土器の胎土にも朱色と言えるほど赤いものが少なくなかった。

一方、ガルビヤのほうは面積としてははるかに大きく、石がちな斜面はシャルキヤ同様に厳しいが、西側斜面に自然の道がつけられており、この道をたどると比較的容易に上ることができた。頂上の一番高くなった部分にはローマ時代の柱が転がっており、ハート形の柱台も確認することができた（図8）。頂上部分の周囲（特に東側と南側）には城壁の基礎部が露出しており、南東の角では部屋も確認できた（図9）。

この頂上部分の東側はワディ・ザルカに向かって急斜面となっているが、西側には段々になったテラス状の空間が石の壁で作られていた。上から二段目のテラスでは、西側に南北に走る石列とそこから直角に折れる北側の石列をおおまかに確認することができたが、現状では浮いている石と生きている石を区別することは困難だった（図10）。ゴードンらのプランは非常に詳しく参考になるが、その正確さは再検討の必要があると思われる。西側の石列には五個所ほど石が四角く部屋状に固まっている所があり、ゴードンらもそれらを塔、一番北側の二つは城門として報告している。しかし、これも正確には区別できなかった。ただこの二番目のテラスにはかなりの広さの平坦な面があり、生活空間として十分機能できたものと思われる。

ガルビヤではシャルキヤよりも多くの土器を表採することができた。年代的には鉄器時代（特に早い時期のもの）とローマ時代のものが半々ぐらいであった（図11）[10]。それ以前の土器やその間の時代の土器は見られなかった。こちらでは調理堝なども採集することができ、平坦なテラスの存在とともに、日常生活がある程度営まれていたことを示していると思われる。

この二つの遺跡は周囲を見渡す険しい崖の上に造られており、周囲は川が取り囲んでいた。アクロポリスは堅固な城壁に囲まれており、裾野からそこまで何重ものテラスが作られていた。このような構造は「砦」として理

図8　タル・ア・ダハブ：ローマ時代の柱

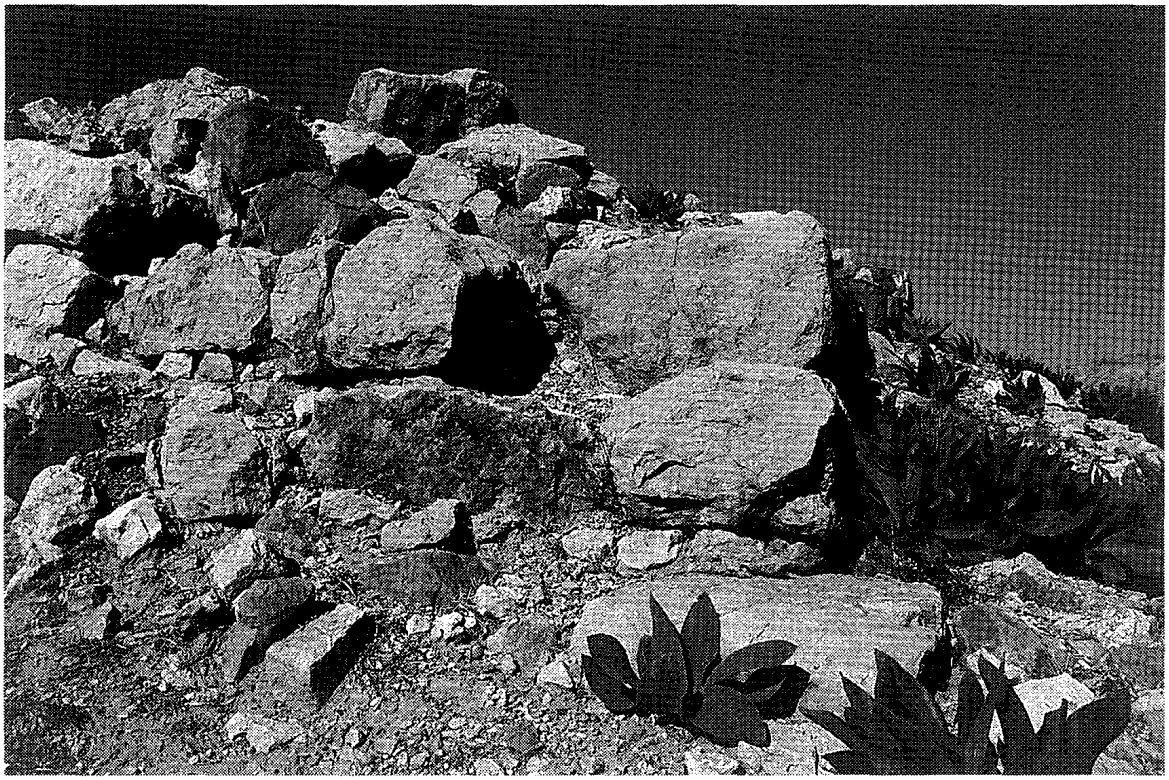

図9　タル・ア・ダハブ：アクロポリスの城壁

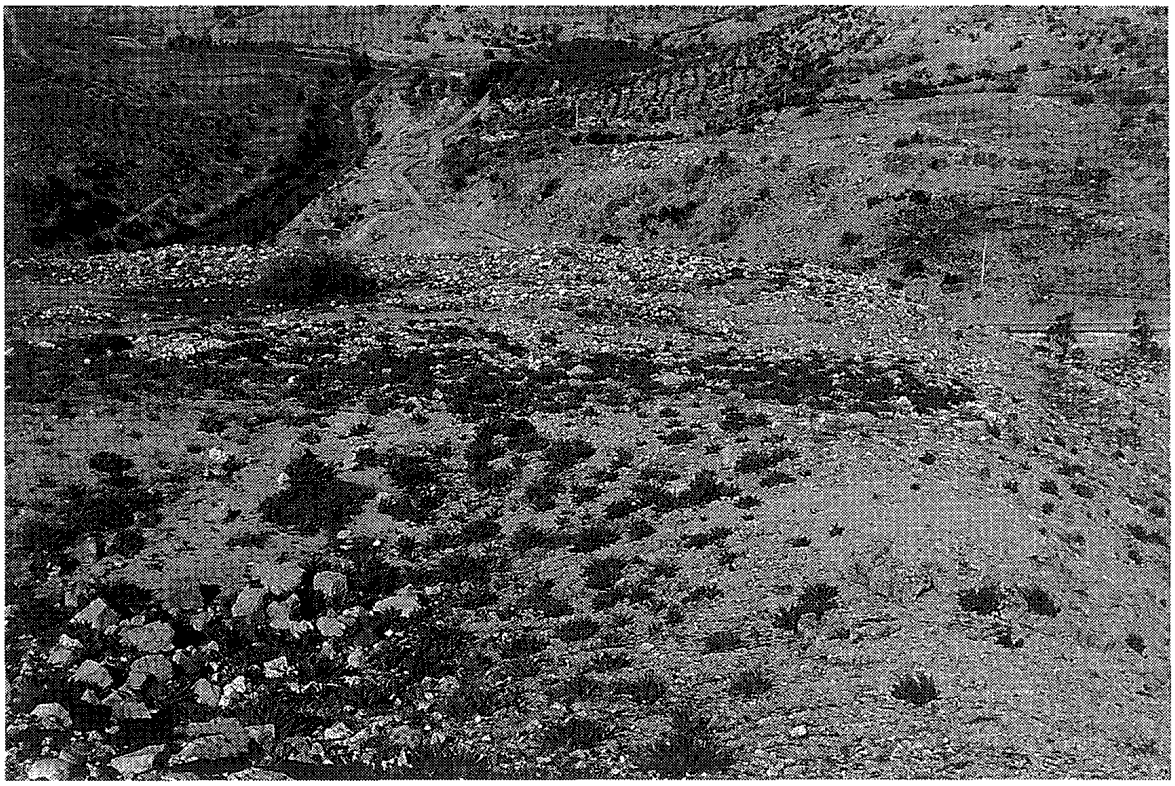

図10　タル・ア・ダハブ：二段目のテラス

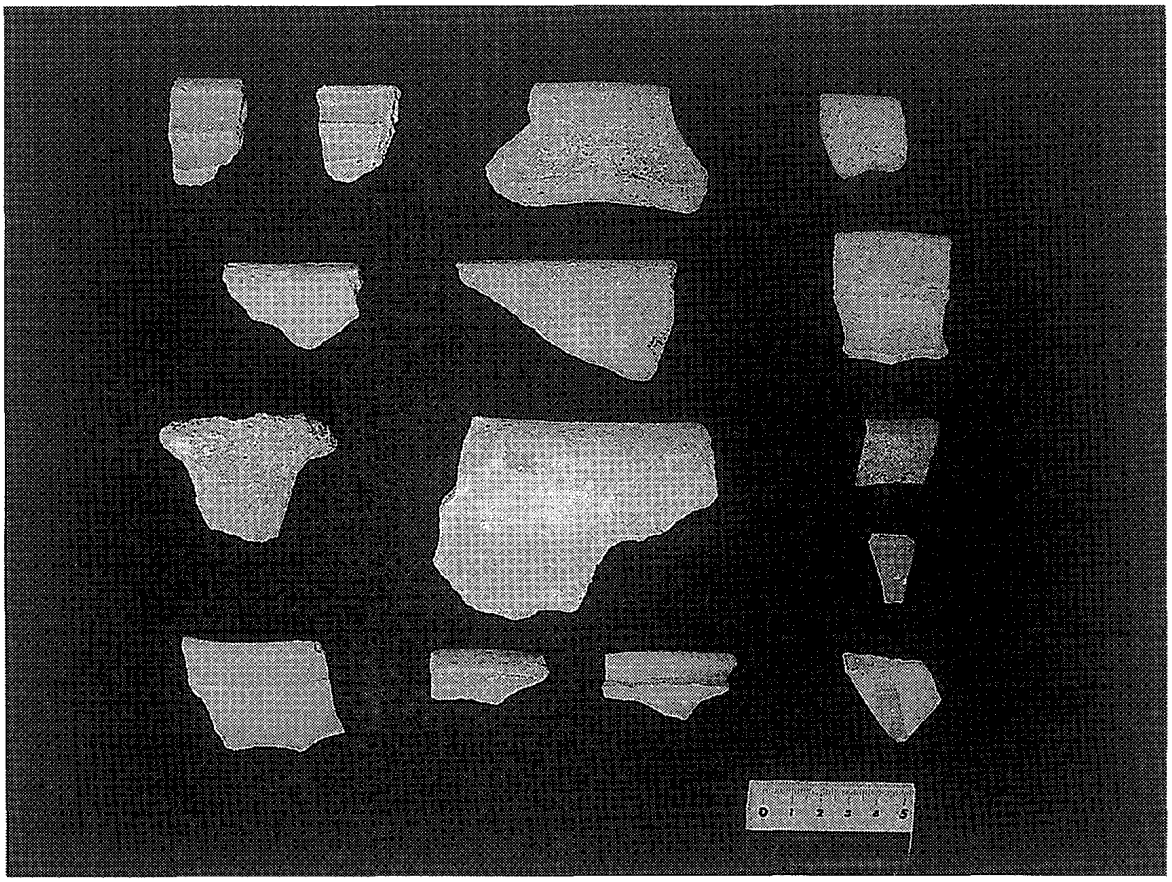

図11　タル・ア・ダハブ・ガルビヤの土器

解することがもっとも自然だと思われるが、ガルビヤのほうはただの砦としては規模も大きく、テラスで日常生活が営まれていた可能性も高い。下の方のテラスは生活の場、頂上のアクロポリスは城塞だったのかもしれない。一方シャルキヤのアクロポリスは小さく、生活があまり行われていなかった可能性も高いので、これを独立した遺跡と考えるのには無理があるだろう。これらは二つ一組でワディ・ザルカを両側から守る砦として機能していたものと思われる。

（2）タル・ダイル・アッラ

今回調査することができたもう一つの遺跡は、タル・ダイル・アッラである（図12）。これはワディ・ザルカの河口付近にあり、周囲はすでにヨルダンの谷東側の平野となっていた。ヨルダンの谷には南北の道路が走っており、すぐ北側にタル・アル・マザール、タル・ア・サイディーヤの遺跡丘を見ることができた。

この遺跡は一九六〇年以来ライデン大学のフランケンが発掘しており、後期青銅期時代の神殿が発掘され、豊富な宗教遺物が出土したことで有名である。また鉄器時代になると城壁のある町が造られ、民22―24章と関係する漆喰の壁に書かれた「バラム碑文」も出土している。今回はヨルダン政府考古局のダイル・アッラ地区の責任者であるフセイン・マフムード・アルジャラー氏が遺跡を案内してくれ、そのすぐ横にある調査用の宿舎や仮設の博物館も見せてくれた（正式な博物館は、来年建築予定ということである）。

最初に検出された神殿は遺跡の北側にあったということだが、埋め戻されていて確認することはできなかった。報告書によると、テルにはそれ以外の建物を建てる十分な場所がないので、この遺跡はもっぱら宗教遺跡で住居はなかったとされている。土器は後期青銅器時代、鉄器時代のものが報告されているが[11]、特に鉄器時代のものは西パレスチナのものと形式が違い、アラム人のものだと解釈されている。今回の調査でも鉄器時代の土器を確認することができたので、エン・ゲヴの土器と比較することが可能であろう（図13）。

以上二つの遺跡の性格を考えると、タル・ダイル・アッラはペヌエル、タル・ア・ダハブはマハナイムである

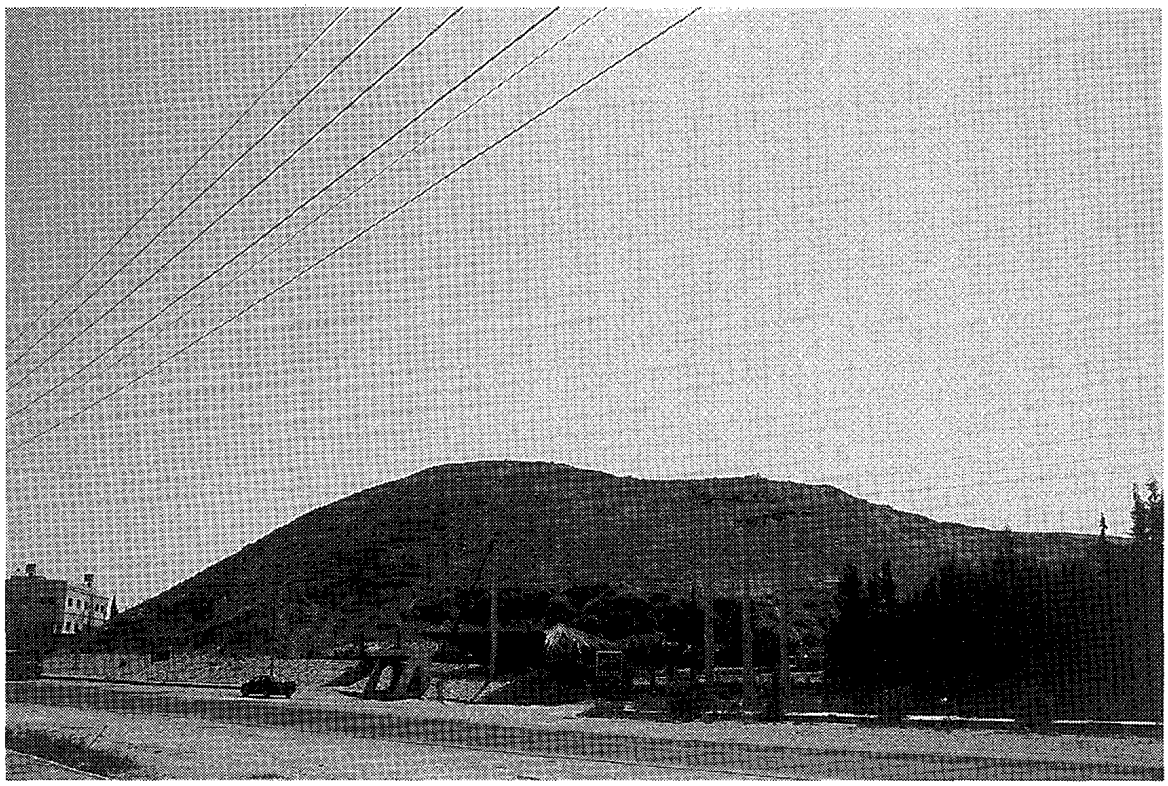

図12　タル・ダイル・アッラ：北東から見た遺跡丘

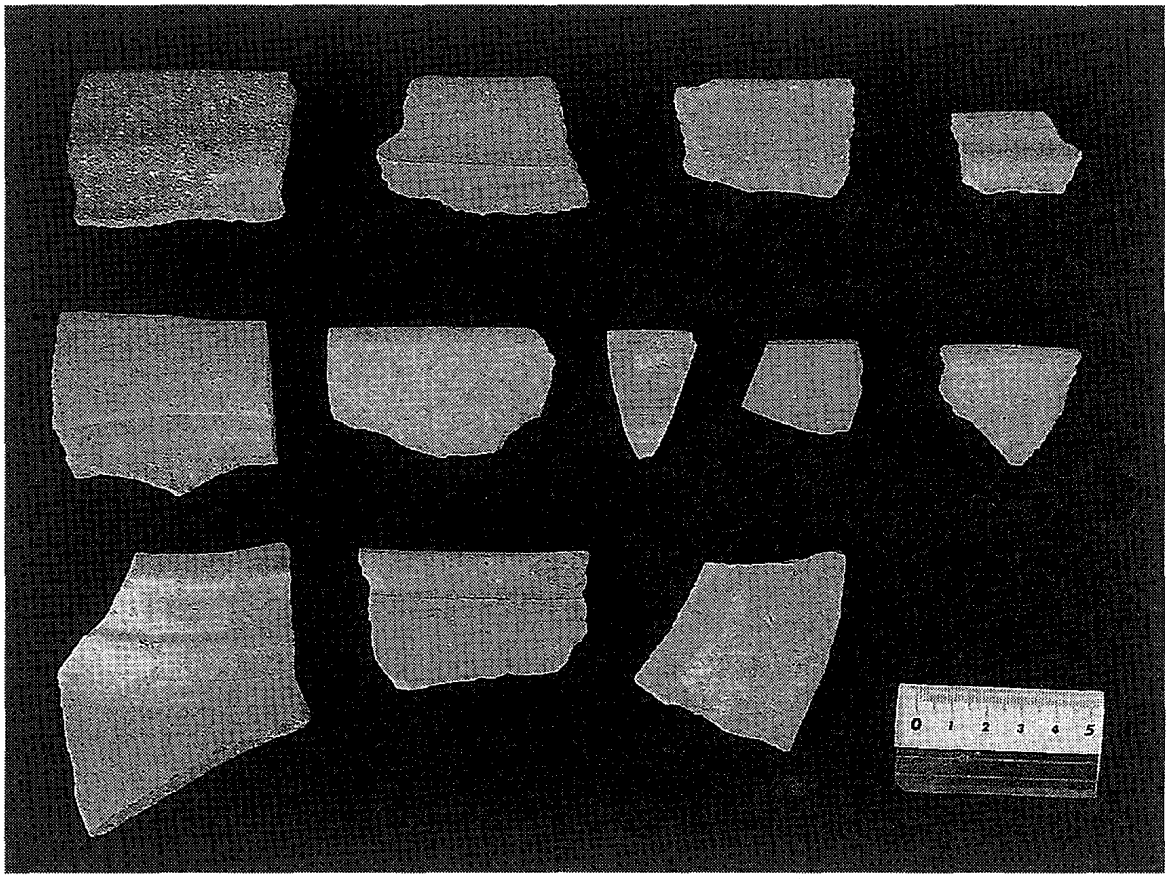

図13　タル・ダイル・アッラの土器

可能性がもっとも高いだろう。タル・ア・ダハブは基本的に大規模な「砦」だったと考えられ、逃亡中のダビデが立てこもるのにふさわしく、この地域の支配の中心地としての存在感を持っている。タル・ア・ダハブという名も「黄金の丘」を意味しており、このような遺跡の性格を反映している可能性がある。年代的にも鉄器時代初期の土器だけが見られ、それ以降ローマ時代までの土器が見られないことも文書史料から知られるマハナイムの歴史と合致している。また、双子の丘はそれぞれ独立しているとは考えにくく、一つをペヌエルもう一つをマハナイムとするには無理がある。二つ一組である点はむしろヤコブのマハナイム伝承と合致している。一方、タル・ダイル・アッラは基本的に神殿を中心とした遺跡で、やはりヤコブが神と格闘したという伝承に合っているだろう。

今回はマハナイムのもう一つの候補地タル・ヒジャズを調査することはできなかったが、これは小さなテルらしく、双子にもなっていないので、可能性は低いと思われる。またタル・ダイル・アッラをペヌエルとした場合のスコトの候補地タル・アル・ヒサスも今回調査できなかった。しかし、タル・ダイル・アッラの周囲には鉄器時代の遺跡丘がかなりあるので、スコトの候補地には不足しないだろう。もちろん両方の遺跡とも今後の調査に加えるべき遺跡だと考えられる。

タル・ア・ダハブは、歴史的に見ても考古学的に見ても重要な遺跡であるにもかかわらず、現在まで発掘調査がなされていない。ダビデ・ソロモン時代の勢力の強さが問題になっている現在、この遺跡の性格を解明することには大きな意味があるだろう。特にエルサレムのダビデの町（「シオンの砦」？）の発掘が十分にできる見通しは現在の所なく、ここはダビデ時代の砦、宮殿建築を知る可能性のある貴重な遺跡である。また、この遺跡は後代の建築活動による撹乱が最小限だと考えられることも魅力である。ヨルダンの考古学では鉄器時代後半の物質文化はかなり解明されつつあるが、前半に関しては資料が非常に限られている。そういう意味でもこの遺跡の発掘は大きな意味を持つだろう。

五　ヨルダンの谷沿いの遺跡

今回の調査では、これら二つの核となる遺跡の他にも、

この地方の鉄器時代の全体的状況をつかむため、ヨルダンの谷沿いのいくつかの遺跡を調査した。具体的には北からペッラ（Pella）、タル・アブ・アル・ハラズ（Tall Abu al-Kharaz）、タル・ア・サイディーヤ（Tall as-Sa'idiyya）、タル・アル・マザール（Tall al-Mazar）である。

ヨルダンの谷では平野部が西岸よりも東岸に広く広がっており、ここに数多くのテルを見ることができた。イブラヒムらによるヨルダンの谷東岸の一般調査によると、ガリラヤ湖から死海までの間に一〇六の遺跡が認められるという（Ibrahim, Sauer, Yassine, 1976）。このうち後期青銅器時代に居住が見られるものは六箇所だけであるが、鉄器時代第Ⅰ期になると十九、鉄器時代第Ⅱ期にもそのほとんどが継続して十七箇所見られる。これらの遺跡はその後多くが放棄され、ペルシャ時代には別の遺跡を中心に八箇所だけで居住が見られる。このことは、ヨルダンの谷が鉄器時代、特にその初期に重要な役割を果たしていたことを示しているだろう。

ペッラは新石器時代からビザンティン時代に至る長い居住の歴史を持つ遺跡であるが、鉄器時代の遺構はあまりよく残っていない。土器はさまざまな時代のものを確認することができたが、遺構としては中期青銅器時代の大きな泥レンガ製の城壁がもっとも目につく遺構であり、それ以外はローマ・ビザンティン時代の教会等が中心だった。鉄器時代からも祭儀台など有名な遺物が出土しているが、それと結びつけられる遺構は知られていない。そういう意味では、ペッラはヨルダンの谷の遺跡の全体的な傾向に合っているとは言えない。

タル・アブ・アル・ハラズは、ワディ・ヤビスが平野部に接する所に位置する遺跡で、現在スウェーデンのP・フィッシャーが発掘している（Fischer 2001 参照）。下の町には大きな中庭式の住居跡、頂上部分には頑丈に作られた正方形の建物があり、城塞のように見えた。この建物は周囲が漆喰で塗られており、発掘者によって「白い建物」と呼ばれている。土器は、鉄器時代第Ⅰ期から第Ⅱ期のものが連続して見られた[12]。その意味では、エン・ゲヴや他のトランスヨルダンの遺跡との比較資料として重要であろう。

遺跡の頂上からは、ヨルダンの谷と対岸にあるギルボア山がくっきりと見えた。一般に聖書のヤベシュ・ギレアドはワディ・ヤビスのさらに上流にあるタル・アル・マクルーブ（Tall al-Maqlub）と考えられることが多い（Noth 1953 : 28–30 ; Aharoni 1979 : 379 ; Ottosson 1969 : 195–96）が、このタル・アブ・アル・ハラズも十分可能性があるだろう。[13] サウル王はギルボア山で殺され、そのふもとのベト・シャンで首がさらされたが、ヤベシュ・ギルアドの人々がその遺体を引き取って埋葬したと言われている（Ⅰサム31・11―13）。タル・アル・マクルーブも不可能ではないが、西岸までは距離があり、実際に目の前でこの状況を見ることができるタル・アブ・アル・ハラズのほうが現実的かもしれない。

タル・ア・サイディーヤはタル・ダイル・アッラの北一〇キロメートルほどのところにある大きな遺跡丘である。北側には鉄器時代第Ⅱ期の水利施設があり、本隊が行った時にはちょうどその保存作業が終わったところであった。テルからは初期青銅器時代、後期青銅器時代、鉄器時代など今回調査した遺跡の中ではもっとも多様性のある土器を認めることができた。土器は時代ごとに表採できる地点がまとまっており、初期青銅器時代は下の町の南側、後期青銅器時代は下の町の北側、鉄器時代のは上の町に集中していた。これは下の町は後期青銅器時代後に放棄され、墓域になったという発掘報告と合致している（Tubb, J. N. 1989 : 530）。この町は聖書のツァレタンと同定されることが多く（Homès-Fredericq and Hennessy 1989 : 524 ; McDonald 2000 : 149）、テル頂上部に見られる住居遺構や水利施設の規模からしても鉄器時代にこの町が繁栄していたことは疑いない。

タル・アル・マザールの調査は予備調査で行った。ここでは発掘者によって鉄器時代第Ⅰ期の神殿遺構、第Ⅱ期の宮殿城塞が報告されているが（Yassine 1984 ; 1988）、現状ではそれらは露出していなかった。ただタル・アル・マザールで表採できる土器はほとんどすべて鉄器時代のものだった。この遺跡は規模も小さい（三〇〇平方メートル）が、タル・ダイル・アッラとタル・ア・サイディーヤから互いに見える中間に位置している点が興味深い。地元の考古局のアルジャラー氏は、この遺跡に神殿があり、タル・ア・サイディーヤから宗教遺構が出ていないことに意味があると指摘していた。

今回調査できたヨルダンの谷沿いの遺跡は限られているが、鉄器時代のこの地域には南北に大きな町が並んでいたことが知られた。青銅器時代、ペルシャ時代の遺跡が少ないことと合わせて、鉄器時代がこの地域の繁栄期であったことを示しているだろう。このことはヨルダン川に沿って南北に走る道の重要性を示しており、この地域とエン・ゲヴ等ガリラヤ地方や西パレスチナとの関係は今後検討すべき課題であろう。またこの道と「王の道」との役割分担も考慮すべき問題だろう。(14)

六　結論

今回の調査で、トランスヨルダン北西部の鉄器時代の考古学的状況を大きくつかむことができた。この地域には鉄器時代に新しい遺跡が多く作られ、遺跡の分布が青銅器時代とは大きく変わっていた。このことはエン・ゲヴが鉄器時代第Ⅱ期に新しく作られたこと、青銅器時代に栄えたテル・ハダルからガリラヤ湖東岸の中心的都市の役割を奪ったこと（Kochavi 1998：28）等を理解する上で考慮すべき点であろう。またヨルダンの谷の東側沿いには重要な道があったと考えられ、王の道だけでなく、この道との関連でエン・ゲヴを考える必要もあると思われる。

鉄器時代にこのような変化が起こった理由として、トランスヨルダンにおけるイスラエル人の存在、アラムの南方進出が考えられる。このことは、前九世紀のエン・ゲヴが本当にアラムの町だったのか、それは周辺の地域とどういう関係にあったのか、それ以前（前一〇世紀）にエン・ゲヴは存在していたのか、存在していたとするならイスラエルとの関係はどうだったのか、という問題と関係している。

今回の調査で、前九世紀にアラム領となったラモト・ギレアドはタル・アル・フスンが最有力であることが示された。前九世紀に南に拡大したとされるアラムの勢力範囲や物質文化を知るためにはこの遺跡の調査が重要だろう。タル・ア・ルマスやア・ラムサ等これに付随したと思われる遺跡の成果もこれに加味することができる。ヨルダンの谷沿いの遺跡にもアラムの土器が知られている例がある。これらにエン・ゲヴ等イスラエルにあるアラムのものだった可能性のある遺跡の成果を加えて総合的に研究するなら、これまで知られていなかったアラム

の実態が明らかになってくるだろう。

またダビデらの砦があったとされるマハナイムは、タル・ア・ダハブの双子の遺跡丘である可能性が示された。前一〇世紀のイスラエル統一王国の力がどの程度のものだったかは現在さかんに議論されているが、まったく手つかずになっているマハナイムを調査することができれば、この問題を解く鍵となるだろう。ラモト・ギレアドも前一〇世紀にはイスラエル領にあったと言われており、その成果を利用することもできる。

このように前一〇―九世紀の北西ヨルダンは、パレスチナの歴史において今なお未解決の問題を解くための重要な地域だと言える。今後この地域の研究がさらに進むことを期待するとともに、エン・ゲヴ遺跡の性格もこの地域全体の変化の中で捉える努力をしていきたい。

謝辞

図1、5、11、13の作成には慶應義塾大学大学院の高田学氏の協力を得た。また図3、4は日本聖書考古学発掘調査団から提供していただいた。感謝したい。

注

(1) エン・ゲヴ遺跡の最盛期は鉄器時代第Ⅱ期と考えられるので（Sugimoto 1999）、今回の調査も鉄器時代の遺構を含むと思われる遺跡を中心とした。実際の調査にはローマ・ビザンチン時代のデカポリスも含まれていたが、デカポリスの遺跡は鉄器時代の遺跡と大きく性格が異なり一度に扱うのに無理があるので、ここでは鉄器時代に関連した遺跡に限定して報告したい。

(2) 鉄器時代のエン・ゲヴは、トランスヨルダンの高地を南北に走る「王の道」（民20・17、21・22）から西に分かれ地中海に抜ける通路の中継地として重要な役割を果たしていたと考えられる（Kochavi 1998）。エン・ゲヴの中心的な遺構である列柱式建物も倉庫や商館として理解されることが多い（小川一九九三、置田二〇〇一、千巌二〇〇一）。この交易関係を理解する上で、王の道上にあるとされるラモト・ギレアド（ヨルダン北部）やアシュタロト（シリア）等との地理的関係が十分に把握される必要がある。またこの地域の交易路の全体像を把握することにも大きな意味がある。

(3) Ⅰ王20・26―30によると、アラム・ダマスカスの王ベン・ハダドはこの町から北イスラエルのアハブと戦うため出陣し、敗走した後この町の奥の部屋に逃げ込んだことが記されている。また、Ⅱ王13・17では預言者エリシャがイスラエル王ヨアシュに対してアフェクでアラムを打つように預言している。明らかに前九世紀のアフェクはアラムの支配下にあり、城塞都市としての性格を持

っていたことが考えられ、エン・ゲヴで明らかになってきている状況と呼応している。

(4) 例えば、この地方の代表的な遺跡であるタル・アシュタロトは、予備調査しかなされていない。Abou Assaf 1968; 1969 参照。

(5) あるいはこのことは、I王20章に記されているその前のアハブとベン・ハダドの戦いで起こったのかもしれない。

(6) 月本団長による。

(7) 地名が多少動くことはよくある現象であり、実際ア・ラムサの町とタル・ア・ルマスが離れているようにこの地域全体がラモト・ギレアドの範囲と考えられていた可能性もある。また、フスンは「城塞」の意味で、ラモト・ギレアドの役割と合わなくはない。

(8) ギデオンはミデヤン人討伐にペヌエルとスコトの町の人々が協力しなかったことを非難しており、これらの町がイスラエル領にあったことが知られている(士8・4—17)。サウル王の時代になると、マハナイムはイスラエルのギレアド支配の中心となり、彼が戦死した直後にもその将軍アブネルがここで息子のイシュバアルを即位させている(IIサム2・9)。またイスラエル定着時代には「レビ人の町」として記録されている(ヨシュ21・36、I歴6・65)。

(9) I・フィンケルシュタインは、これまで前一〇世紀のものとされてきた土器の組み合せをほぼ一世紀引き下げるべきだとしており、その結果前一〇世紀には非常に貧しい物質文化しかなかったことになる(Finkelstein 1996; Finkelstein 1999 参照)。この説には強力な反論も展開されており(A. Mazar 1997; Bunimovitz and Faust 2001; Zarzeki-Peleg 1997; Ben-Tor 2000 等参照)、非常に混乱している。エン・ゲヴでも最古の土器の組み合せはこの時代のものであり、この遺跡の存在年代の上限を決定する上でもこの議論は大きな意味を持っている。

(10) ゴードンらは、土器のほとんどは鉄器時代第I期のもので、第II期の存在は土偶一点によって確認できるとしているが(Gordon and Villiers 1983: 283)、この点は注意が必要だろう。杉本「円盤を持った女性土偶」(二〇〇一)参照。

(11) それ以外には銅石器時代、アラブ時代の居住があった。

(12) その他若干ローマ時代以降の土器片が見られた。

(13) タル・アル・マクルーブをヤベシュ・ギレアドとする主要な根拠は、エスセビウス(110: 11-13)がヤベシュ・ギレアドを「山の中にある村で、ペッラからジャラシュに行く道の六番目のマイルストーンの近くにあった」と記していることである。この同定を受け入れるかどうかはエウセビウスの評価にかかっているが、グリュックやマッケンジーはタル・アブ・アル・ハラズをヤベシュ・ギレアドとしており(Glueck 1951: 268-75; McKenzie 1965: 407)、マクドナルド(B. MacDonald 2000: 202-204)もどちらの可能性もあるとしている。

(14) アハロニ(Aharoni 1979: 54-57)は、「王の道」は主

として遊牧民の遊牧や隊商に用いられたことを指摘している。

参考文献

Abel, F.-M. 1967 *Geographie de la Palestine* 2 vols. (3rd. ed.) Paris : Gabalda.

Aharoni, Y. 1979 *The Land of the Bible : A Historical Geography* (2nd rev. ed.) London : Burns & Oates.

Abou Assaf, v. A. 1968 Tell-Aschtara in Südsyrien : Erste Kampagne 1966 *AAS* 18 : 103-122.

Abou Assaf, v. A. 1969 Tell-Aschtara : 2. Kamgagne 1967 *AAS* 19 : 101-108.

Albright, W. F., 1929 New Israelite and Pre-Israelite Sites : The Spring Trip of 1929, *BASOR* 35 : 1-13.

Ben-Tor, A. 2000 Hazor and the Chronology of Northern Israel *BASOR* 317 : 1-10.

Bunimovitz, S. and Faust, A. 2001 Chronological Separation, Geographical Segregation or Ethnic Demarcation? Ethnography and the Iron Age Low Chronology *BASOR* 322 : 1-9.

Coughenour, R. A. 1989 A Search for Mahanaim. *BASOR* 273 : 57-66.

Dalman, G. 1913 Jahresberichtes des institutes für das Arbeitsjahr 1912/13. 8 : Die Zeitreise. Auf den suche nach Mahanaim. *Palästina-Jahrbuch* 9 : 66-73.

De Vaux, R. 1978 *The Early History of Israel*.(E. T. by D. Smith) Philadelphia : Westminster.

Finkelstein, I. 1996 The Archaeology of the United Monarchy : An Alternative View. *Levant* 28 : 177-187.

Finkelstein, I. 1999 Hazor and the North in the Iron Age : A Low Chronology Perspective *BASOR* 314 : 55-69.

Fischer, P. M. 2001 The Iron Age at Tall Abu al-Kharaz, Jordan Valley : The Third Major Period of Occupation. A Preliminary Synthesis. *SHAJ* : 305-316.

Franken, H. J. 1979 The Identity of Tell Deir 'Alla, Jordan. *Akkadica* 14 : 11-15.

Glueck, N., 1943 Ramoth-Gilead *BASOR* 92 : 10-16.

Gordon, R. L. and Villiers, L. E. 1983 Telul edh Dhahab and its Environs Survey of 1980 and 1982 : A Preliminary Report *ADAJ* 27 (1983) : 275-289 and 54-69.

Hölscher, G. 1906 Bermerkungen zur Topographie Palästinas. *ZDPV* 29 : 135-37.

Homès-Fredericq, D. and Hennessy, J. B. (eds.), 1989 Archaeology of Jordan. *Akkadica Supplementum* VIII, Peeters, Leuven.

Ibrahim, M., Sauer, J. A., and Yassine, Kh. 1976 The East Jordan Valley Survey, 1975. *BASOR* 222 (1976) : 41-66.

Kochavi, M. 1998 The Ancient Road from the Bashan to the Mediterranean. *From the Ancient Sites of Israel : Essays on Archaeology, History and Theology in Memory of Aapeli Saarisalo (1896-1986)*, eds. T. Eskola and E. Junkkaala, Theological Institute of Finland.

Lapp, N. L. 1997 Tell er-Rumeith. *The Oxford Encyclopedia of Archaeology in the Near East*, 4, ed. E. M. Meyers. New York : Oxford University.

Lapp, P. W. 1967 Tell er-Rumeith. *American Schools of Oriental Reseach Newsletter* 6 : 7.

Lapp, P. W. 1968 Tell er-Rumeith. *Revue Biblique* 75 : 98–105.

Lemaire, A. 1981 Galaad et Makir. *Vetus Testamentum* 31 : 39–61.

Leonard, A. 1987 The Jarash-Tell el-Husn Highway Survey. *ADAJ* 31 : 343–90.

MacDonald, B., 2000 *"East of the Jordan" : Territories and Sites of the Hebrew Scriptures,* ASOR Books 6, Boston.

Mazar, B. 1957 The Campaign of Pharaoh Shishak to Palestine. *Supplements to Vetus Testamentum* 4 : 57–66.

Noth, M. 1953 Jabesh-gilead : Ein Beitrag zur Methode alttestamentlischer Topographie. *ZDPV* 69 : 28–41.

Noth, M. 1960 *The History of Israel*. 2nd ed. (E. T. by P. R. Ackroyd) London : Black.

Ottoson, M. 1969 *Gilead : Tradition and History* (E. T. by J. Gray). Lund : Gleerup.

Smend, R. 1902 Beiträge zur Geschichte und Topographie des Ostjordanlandes. *ZAW* 22 : 158.

Sugimoto, T. 1999 Iron Age Potteries from Tel En-Gev, Israel : Seasons 1990–1992, *Orient* XXXIV : 1–21.

Slayton, J. 1992 Penuel *Anchor Bible Dictionary.* vol. V : 223

Tubb, J. N. 1989 Sa'idiyeh (Tell el) in "Archaeology of Jordan" eds. D. Homès-Fredericq and J. B. Hennessy, *Akkadica Supplementum* VIII. Leuven : Peeters.

Weippert, M. 1997 Israélite, Araméens et Assyriens dans la Transjordanie septentrionale. *ZDPV* 113 : 19–38.

Yassine, K. 1984 The Open Court Sanctuary from the Iron I at Tell el-Mazar Mound A, *ZDPV* 100 : 108–18.

Yassine, K. 1988 Ammonite Fortresses, Date and Function. *Archaeology of Jordan : Essays and Reports.* ed. by K. Yassine. Amman : Department of Archaeology, University of Jordan.

Zarzeki-Peleg, A. 1997 Hazor, Jokneam and Megiddo in the Tenth Century B. C. E. *Tel Aviv* 24 : 284–286.

小川英雄　一九九三　「エン・ゲブ出土の列柱付き建造物について」『オリエント』41-1 : 48–64°

置田雅昭　二〇〇一　「イスラエル国エン・ゲヴ遺跡列柱式建物の規格」『西アジア考古学』2 : 127–132°

杉本智俊　二〇〇一　「円盤を持った女性土偶その性格と機能」『史学』70-3, 4 : 135–170°

杉本智俊　二〇〇二　「湖の城塞都市エン・ゲヴ—二〇〇一年度発掘調査報告」『今よみがえる古代オリエント（二〇〇一）』: 26–29°

杉本智俊　二〇〇三　「鉄器時代の北西ヨルダン」『今よみがえる古代オリエント（二〇〇二）』: 1–5°

千歳ふみ　二〇〇一　「イスラエル鉄器時代の都市と公共建造物エン・ゲヴ遺跡における列柱式建造物の検討」『古事』5 : 17–33°